＜ESSAY＞

中山道

渡辺 尚夫＊

中山道馬籠宿

東京から東名高速の流れに乗って4時間あまり、琵琶湖の畔で高速道路をおりると、いよいよ最後の行程となった中山道がボクたちを待ち受けている。ここは彦根市。草津で東海道と合流し、瀬田大橋を渡り逢坂山と九条山を越えれば京都の三条大橋へ着く。日本橋から歩き始めて丸4年がたち、7ヶ月の子は4才に、小学校1年生の坊主が5年生になった。

そんなボクたち家族5人は、初めて行く京都へ東京から歩いて旅することになったのだ。新幹線に乗れば2時間少々、車で行っても6時間の距離をボクたちは彦根までで221時間40分かけて歩いてきた。「地球環境にやさしい」がテーマの昨今、時代と逆行する旅かも知れない。新幹線の編成出力は12,480kW、これに乗って東京～京都を往復すると家族5人で約84kgのCO_2を排出するが、車で何回も往復してきたボクたちは、すでに2,167kgのCO_2を排出してきた。しかし1日当たりに換算すると、新幹線42kgに対して車54kgとなるので、たとえ中山道へ行かなくとも生活の中での排出量を考えれば、あながち無駄ではなさそうである。

では、221時間40分はどうだろう。この忙しい社会の中では実に無駄に見える。新幹線の100倍の時間を掛けて京都へ行くことに、どんなメリットがあるのだろう。大人二人で1日40kmも歩けば2週間で着くところを、乳母車に赤ん坊を乗せ、幼児の手を引いて、すでに40日間もかかっているが、新幹線で行った場合の2時間ではどうだろう。車中、小学生はゲーム、パパは新聞、幼児は昼寝と親子の会話もなく気がついたら京都駅ではないだろうか。ところがボクたちは221時間40分、家族の会話を続けてきた。もちろん名所旧跡についてパパがボクたちに語ってきたのは当然だが、200時間以上もそんな話は語れない。ときには街道沿いの野花や虫の話になったり、地図の見方の話になったり、地名の由来について話が及んだりする。日頃、仕事や家事に追われる親、テレビやゲームの虜になっている子供達、そんな家族にたっぷりとした会話の時間を与えてくれるのが中山道である。

そもそも500km以上の行程を、歩いて旅するとは考えないものである。足腰に自信の無くなったおじさんたちは、腰に万歩計を着けて毎日1万歩を目標に暮らしている。人によってその差は有るものの、1歩は60cmといったところだから、6kmということになる。そのペースで京都へ向かえば83日かかる計算になるが、ボクたちは実に健脚である。4才の次男は2才の頃から、一日平均12.1km、長い日には一日20kmを歩いてきた。朝、遠くに霞んで見えていた山も、夕方には遙か後方へと消えてしまう。人間の足も馬鹿に出来ないと感じる瞬間である。100kmもある長い関東平野を歩いてゆくと、熊谷の荒川土手で遙か彼方に真っ白に輝く浅間山が見え始める。高崎からの緩い上りに汗を流し、碓氷峠越えであごが上がり、ホッとする涼しさの軽井沢を抜ければ、その山容が目の前に広がる。中山道が街道として賑わっていた頃、誰もが歩いて旅をしていた。ちょっと役所へ行って来るといっても、夜明け前の青山半蔵は、片道二日掛かりで、馬籠から木曽福島を往復した。その47kmの道のりなど車で行けば1時間。便利さを得た我々は、いったい何を失ったのだろう。

また、歩いて旅を続けると、実に様々な人々との出逢いがある。道が分からなくなったときに尋ねる土地のご老人や、立ち寄った資料館の係員から下校途中の小学生まで。しかし街道歩きにはもう一つ別の出逢いもある。同好の士である。ボクたちとは逆に京都から東京へ向かって旅する人達は、すれ違う瞬間に、お互い同じ目的の旅人だと言うことが分かる。特にハイキングスタイルのような大げさな格好をしていなくとも、土地の人とは違う雰囲気と、長距離を歩いている自信にみなぎったオーラを感じる。そんな時はお互い歩を休め、これから進む行程についての情報を交換する。こんな出逢いもスローペースな徒歩旅行の醍醐味である。

京都議定書も2月に発効となり、いよいよ日本も真剣に地球温暖化に取り組まなければならない状況となった。1人当たりの電気消費量5.5kWh／日，1人当たりの食事によるエネルギー供給量2,619kcal／日、一人当たりの水使用量99リットル／日等々。日常の生活を続けるだけで、我々は膨大なエネルギーを消費している。一方、二酸化炭素を吸収する森林は減少の一途である。ボクたちが歩いてきた木曽路の鳥居峠にはブナの天然林がある。これには280t-C/haの炭素蓄積量がある。まだまだ中山道の木曽路には人工林や天然林が豊富だが、下草刈りがされていない林も目立ってきた。エネルギー消費の抑制と森林保護、大人達には分かっているこんな概念を、未来を託す子供達に見せて話して聞かせてあげられる中山道の旅は地球環境貢献になるだろうか。

＊川崎市水道局　経営企画担当